

『禅のこころ-曹洞宗-』

たく はつ 托 鉢

平成29年12月第3週放送

しわす
師走も半ばになりますと、駅前や街頭に立って募金を呼び掛ける人の姿を見るようになります。

時には、網代笠をまぶか
目深に被り、右手に鈴を持ち左手に黒いお椀のような器を持ってお経を唱えている僧侶を目にすることもあるでしょう。最近では、その傍らにその托鉢の趣旨を記したのぼり幡を立てたり、道行く人にお声掛けをしたりと、歳末の助け合いや被災地支援の募金を呼び掛けていることもあります。

本来、仏教でのたくはつ
「托鉢」という行いは、お釈迦さまの時代から続く、教団を維持し発展させて行くための必要不可欠な修行でした。

今でも古い姿を残している東南アジアの寺院では、日本よりもずっと大きい鉄の鉢はち
を首から布ぬのぶくろ
袋で提げ、朝早くから街頭に並んでほどこ
施しとしてのご飯やおかずを直接その鉢に受けます。虫などが入らないように蓋をふた
をしてそれを寺院に持ち帰り、修行僧の食事とするのです。

たくはつ
「托鉢」という言葉が誕生したのは、中国の宋の時代といわれています。お寺は町から離れた山の方に造られるようになり、自給自足を基本とする生活に変わります。そして、必要なものを求めて町に出て托鉢をするようになり、首から下げたすだぶくろ
頭陀袋に日持ちのするお米や麦を受け、修行僧が食事の時に用いる器であるはつ
鉢にお金を受けるようになりました。

「托鉢」の姿は移り変わっても、しゅうちやく
執着から離れたほどこ
施しの心には変わりはありません。「施財の偈」という施しを受けた時に僧侶が唱える言葉があります。

ほどこ
物の施しと教えの施しは多くの功德を生み、
おこな
行う者は心満たされ、その功德は世界をあまねくより良くする。

という、施しの行いをたたえる言葉です。

そして施しを受ける側の僧侶には、施しに対する「多い少ない」などのとらわれの心を離れる修行として行う事が求められます。施す側・施される側のお互いにとって、その施しを一つの大切なえん
“縁”として、仏の教えと出会う場であるともいえるのです。

街頭や商店街などで托鉢姿の修行僧に出会ったら、折角の大切なぶつえん
仏縁です。話しかけてたず
尋ねていただいてもかまいません。ご縁を結んで頂きたいものです。それがこだわりの心を離れた、仏の道につながっていきます。

— 終 —